



「ひらほく新聞」で検索！
ホームページ・ひらほくランド
http://www.hirahoku.com/
バックナンバー含め「ひらほく新聞」を
閲覧・ダウンロード可能です！

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく)山本直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807



喜多川泰(きたがわやすし)1970年生まれ、愛媛県出身。東京学芸大学卒業。1998年に横浜で、笑顔と優しさ、挑戦する勇気を育てる学習塾「聡明舎」を創立。人間的成長を重視した、まったく新しい塾として地域でも話題に。2005年から作家としても活動を開始し、『賢者の書』にてデビュー。現在全14作執筆、ベストセラー作品多数。

今月、『また、必ず会おう』と誰もが言った。(愛称「またかな」という映画の上映会を行います。2013年公開のこの映画の原作は、2010年11月発売の作家、喜多川泰さんの12万部突破のベストセラー作品。喜多川さんは、以前講演会の内容をこちらでご紹介しましたが、執筆されたどの作品も、とても読みやすく、たくさんの方の勇気、元気をもらえて、未来へ向けて生きる意味を学ぶことのできる、感動あふれる素晴らしい作品ばかりです。今月は、その数々の著書の中から、最幸の喜多川ワールドをお届けします。

書籍の出版元、サンマーク出版さんの主催で、昨年11月に『またかな』の上映と喜多川先生の講演会があり、参加しました。第2部、関係者のトークライブでは、以前から面識のあるこの書籍を編集した鈴木七沖編集長のほか、映画化をプロデュース、実現された榊TBSサービスの川上孝裕さんと有難くご縁をいただきました。その川上さんが今春、一人で多くの子どもたちに観てもらいたいと、ネットで寄付を募り、上映権費用にあてるといって、『またかな』学校上映プロジェクトを立ち上げました。私も有難く参加させていただきました。そのご縁から、今回の無償上映をさせていただく運びとなりました。一冊の本から、同じ思いを持つ人の力で次々と人がつながり、まさに大きな輪ができてい

「人生は思いどおりにいく、多くの成功者が座右の銘にする言葉です。」

「人生は思いどおりにいかない、夢を実現できなかった、もつと多くの人が感じる人生の教訓です。」

「人生の教訓が、これほどまでに違うのはどうしてでしょうか？」

「前者にとっては思いどおりにいくことは「当然」であり、後者にとっては思いどおりにいくことは「ラッキー」ではないのです。」

「手紙屋」僕の就職活動を変えた十通の手紙」より

新米福の神の条件：「人知れず他の人のためになるいいことをする」

「他人の成功を心から祝福する」「どんな人に対しても愛を持って接する」「福」に憑かれた男」より

みんなが常識だと思っていることは主にテレビや映画などを通じて植えつけられた一つの価値観ではない。他人となんか比べなくても昨日の自分よりも一歩でも前進しようと努力しているとき、人は幸せを感じるようにできているんだ。」

「上京物語」より

何かにすがったり、頼ったりする生き方をやめて、誰かにとつてなくてはならない存在になることが自立。事実一つ 解釈は無限。『小晴日和』より

「わけもわからず、他の人が幸せやと言っているものを追い求めたり、他人が持っているものを手に入れようとするのが人生やないで。」

「前までは、必死でやってできなかったら恥ずかしいけん、必死になるのをさげとつたとよ。でも、今は負けるのが怖くて逃げとるほうがかつこ悪いと思えるようになった。逃げんで真つ正面からぶつかつていったほうが、かつこいいと思えるようになったとよね。」

「また、必ず会おう」と誰もがいった」より

もし生まれたばかりの赤ん坊の未来がすべて確定していたら、どんな仕事について、どんな生活をして、どんな人生になるのかが生まれた瞬間にすべてわかつて、よりよい未来はつくられます。

「母さんのコロッケ」より

「目の前のことに本気で生きたら、奇跡が起こる。でも、本当は、それは奇跡ではなく、当たり前に出会いなんだ。本気で生きる人には、必ずその夢の実現を応援する人が現れる。」

「スタートライン」より

「ぼくらの可能性は、ぼくらの想像をはるかに超えたところにあるんだよ。それを、自分が手に入れられると想像できる範囲でしか行動しなければ、その可能性

を開花させる人生なんて送れるわけないじゃないか！」

「ライフトラベラー」より

誰かが好きなことを一生懸命がんばる姿っていうのは、そいつが夢を実現したかどうか以上に周りの人の心に影響を与えるんだ。」

「One World」より

人生で「手に入れるもの」は、生まれた環境からでも、才能からでもなく、別なもので決まっている。それは習慣。素晴らしい習慣が素晴らしい結果を引き寄せる。「自分がやっていることが、誰かの役に立っている」という実感は、何物にも代えがたい喜びです。

自分の居場所を、自分で定めることを一人ひとりが行動することによって、初めて、よりよい未来はつくられます。

本を読むことは、よりよい未来をつくるために、たった一人でもできる具体的なアクションなのです。」

最後に最新作、「書齋の鍵」のあとがきから大切なメッセージをどうぞ(抜粋)。

若い頃、ほとんど本など読まなかった僕が、あることをきっかけに、毎日、むさぼるように本を読むようになり、本を書く側にまですりまわりました。その後で、僕の人生の中で起こった変化は劇的でした。

今や、電車に乗れば、老

若男女を問わず、スマホでゲームをしている人たちがあふれています。

「あれが全部本なら……」

実際にそうならば、きつと世界は変わることでしょ。これまで、「本なんて大嫌いだっただのに、読書が好きになりました」という何人もの人に出会ってきました。

夢中にさせる本との出会いさえあれば、どんな時代であれ、本が手放せない人生になるはずですよ。」

喜多川さんの作品は、まさに読書に「夢中になれる」きつかけづくりに最適です。

『またかな』以外で、中高生へ向けて私のお薦めは、「君と会えたから……」と、「スタートライン」です。「君と会えたから……」は、こんなストーリーです。

将来に対する漠とした不安を抱えながらも、自分のやるべきこともやりたいことも見つけられず何もしない、無気力に過ごしていた平凡な高校生の僕のもとに、ある夏の日、美しい女の子がやってきた。そして、彼女から、その後の僕の人生を変える教えを聞くことになる。いつしか彼女に恋心を募らせていた彼の前に次第に明らかになっていく彼女の秘密とは……。

もし、「明日」が無限にあるわけではないとしても、今と同じような今日を生きますか？

人生を変える7つの教え。泣けます！何度読んでも感動ストーリーをぜひ！

泣けます！何度読んでも感動ストーリーをぜひ！

日本新聞協会主催、新聞配達に関するエッセーコンテスト。2015年度の最優秀賞作品をご紹介します。

かけがえのない日々

田井中 治一郎（63歳）
滋賀県東近江市

病院の朝は早い。目覚めると、新聞配達のアルバイトをする息子が顔を見せた。「今日から配達区域がこの近くに変わったから、ついでに寄ったんよ。新聞好きやろ」と、朝刊を手渡してくれた。

12年ほど前の冬、私は思ってもよらない病気で入院した。まだ暗い夜明け前、3階の病室から眺める町並みは、立体的で箱庭のようにきれいだった。人影のない道路を1台の自転車が走る。息子を心待ちにする私には、近づくライトが幸せを運ぶ軌跡のように見えた。部屋の中は暖かいが、受け取る新聞は冷たくて外の厳しい寒さを感じさせる。雪の降る日は氷に触れるようだった。

ドアを開け、「持ってきたでー」とほほ笑み、「また明日来るわ」と手を振って出ていく。わずか1分足らず。そんな朝が3か月ばかり続いた。

梅の花が咲くころに退院し、翌日から息子の配達区域は元に戻った。申し合わせたようなタイミングに私は、はつと笑う。けれど、息子は偶然だと笑い飛ばした。（おわり）

我慢の先に光がある

諭吉が後世に

残したかった言葉

諭吉の論文に『瘠我慢の説』というものがあります。これは20世紀第一日目の、1901年1月1日に新聞紙上の発表されたものであり、当時、諭吉は66歳。この一ヶ月後に亡くなりま

した。遺書とまでは言いませんが、諭吉が後世に残したかった思いであると思われる。その中で「やせ我慢こそ人でも国でも独立を保つための大事な資質の一つである」と論じています。

国が減びそうになり、またたとえ敵に対して勝つ見込みがなくても、つらいことや苦しいことに耐えて一杯努力し、勝負がつく時になって初めて講和する。死を覚悟するかを心に決める。それこそが道である。これは、世の中で言う「やせ我慢」である。

強い者と弱い者が対峙している状態で、それでも弱い者が己の地位を保つていられるのは、この「やせ我慢」があるからである。

たとえ小さな虫であつても、何百キ口の鉄の槌で打たれる時は、それでも自分の足を振り上げて抵抗するのが常である。

何とも諭吉らしさがあふれる文章です。まさに人生の最終ステージにおいて、すべての日本人に語りかけ

るようなエネルギーを感じます。この『瘠我慢の説』は、明治維新の際に江戸城をあつけなく引き渡して抵抗しなかつたとして、勝海舟らを批判していることで有名です。これは別に明治維新を批判しているわけではなく、「薩長が強いからと、簡単に無抵抗降伏した」行為を批判しているのです。この時期、日本はまだ小国であり、列強にいつ飲み込まれてもおかしくない時代でした。これらの言葉は、日本を憂う精神が言わせたものでしょう。

超訳福沢諭吉生き抜く哲学（盛田則夫著）ある実験で幼児を「我慢組」と「欲望組」に分けてその後を追跡調査したところ、人生の成功度合いにおいて「我慢組」の方に軍配が上がる結果が出ているそうです。今の時代も、諭吉の時代と同じように、先の目標に向け、歯を食いしばって「我慢する」ことが重要なのでしょうか。（おわり）

「超一流の二流をめざせ！」という文句にガツンと響く書籍に出会った。著者は、1000万部以上の本を世に送り出してきた孤高のプロデューサー、長倉頭太氏。多くのビジネス書には同じような「当たり前」の成功法則が書かれていてベストセラーとなるも

のもあるが、それは1%の成功者だけのもの、99%の「普通の人」が人生を「自由自在」に生きる方法とは？以下、希望に繋がる秀逸なメッセージをどうぞ。

私たちは「完全でない自分への不安感から完全なるものを求めて、他人（すこい人）のストーリーにはまっついていく」

「他人の人生」で空回りして無駄な時間を過ごす、自分の中に欠乏感が強くなり、「自己重要感」も失う。

「不安情報社会」の闇。私たちは、実は欲しいものなんて何も無い。そんななかで、不安情報を流し続けない限り、資本主義社会は成り立たない。その「不安情報だらけ」だという前提で生きるということ。

もうひとつは、「目の前のことに集中しろ。今この瞬間に、正直に生きる！」ということ。これができないと、「不安情報社会」の格好の餌食となってしまう。

「踊らされずに、踊れ！コンテンツ（情報の内容・中身）が溢れる環境と時代だからこそ、「自分」を誰かが発信する「外」を探すのではなく、その環境を見定めて、自分のリズムで自分のダンスを踊ること。SNSで、個々の情報を表現できる「個性」に価値を見い出せる時代となった。あなたの「世界観」、唯一無二のキャラクターを立た

せるために……

・私は何者なのかを明確に敵をつくるということ
・言い切る
・一貫性があること

「出会いに使い！このキャラクターづくりを理解したうえで、重要視していることは、「なるべく多くの人に会ってほしい」ということ。自分の価値観を情報発信することで、今まで出会えなかつた人に出会える。

「キャラクター」がより成長&進化していくには、やはり現実のリアルな場で人に会うこと」が一番なのだ。人と会い、人と話し、見たり見られたりしながら、人はより磨かれていくもの。

常に「ライブ感」を持てる人間になれ！ライブ感は、人にエネルギーを湧かせる。人にストレートに伝わる。人に衝撃を与えられる。

ライブ感の良さは、「人を巻き込むこと」ができること。必ず人が集まってくる。仲間ができ、「感じる力」がつく。その感情を他

の人と共有できたとき、初めてそこに「感動」が生まれる。喜びの感情をみんなで共有して、それが「感動」に変わる。それが、「人生」を変える。それが人生にとって一番楽しいことだ。

「問いを立てる力」を養え！今の日本の教育では「情報

弱者」しか生まれない。他人の人生を生きるような人間ばかりつくられてきた。人間は、まず感情が動く。感情が動いたときに「問い」が生まれる。そこで「自分」の答えを出してあげれば、自分がつくった現実、自分の人生が生まれる。これが一番「生きていく」のを実感できる感情の流れだ。

時間と金は

出会いに使い！

このキャラクターづくりを理解したうえで、重要視していることは、「なるべく多くの人に会ってほしい」ということ。自分の価値観を情報発信することで、今まで出会えなかつた人に出会える。

「キャラクター」がより成長&進化していくには、やはり現実のリアルな場で人に会うこと」が一番なのだ。人と会い、人と話し、見たり見られたりしながら、人はより磨かれていくもの。

常に「ライブ感」を持てる人間になれ！ライブ感は、人にエネルギーを湧かせる。人にストレートに伝わる。人に衝撃を与えられる。

ライブ感の良さは、「人を巻き込むこと」ができること。必ず人が集まってくる。仲間ができ、「感じる力」がつく。その感情を他

の人と共有できたとき、初めてそこに「感動」が生まれる。喜びの感情をみんなで共有して、それが「感動」に変わる。それが、「人生」を変える。それが人生にとって一番楽しいことだ。

「問いを立てる力」を養え！今の日本の教育では「情報

弱者」しか生まれない。他人の人生を生きるような人間ばかりつくられてきた。人間は、まず感情が動く。感情が動いたときに「問い」が生まれる。そこで「自分」の答えを出してあげれば、自分がつくった現実、自分の人生が生まれる。これが一番「生きていく」のを実感できる感情の流れだ。

弱く、たまたま東京ドームに巨人阪神戦の観戦に行った時のこと。5万5千人の満員御礼の表示を見た時、涙が出てきた。それは、これだけの人が買ってくれているのか、ということと、当時の警察庁の発表で、その半分、年間で3万人の人が自死しているというそのダブルのリアル感を感じた。

いつか自分が死ぬことを忘れるな。本当に自分を変えなければ、植えつけられてきた価値観や常識から離れ、真の自分を取り戻したいならば、死を意識しながら動くことをオススメしたい。そこから真剣に考えた時、必ず自分のやること、やれることが見えてくるはずである。

実は、この書籍を編集したのが、表面でもご紹介したサンマーク出版の鈴木七沖さん。長倉さんとの対談動画も拝見して、そこからのお話も含めました。その対談での最後のところ……

現在、ブログやツイッターなど、実は人類史上一番

活字を読んでる日本人。ただ、そのライフスタイルから、残念ながら「本」が外れている。静かな時間をつくり、本と向き合うことは、自分を研鑽できる時間。

以前、鈴木さんが担当した「自殺して言えなかつた」という本が、6万部売れた頃、たまたま東京ドームに巨人阪神戦の観戦に行った時のこと。5万5千人の満員御礼の表示を見た時、涙が出てきた。それは、これだけの人が買ってくれているのか、ということと、当時の警察庁の発表で、その半分、年間で3万人の人が自死しているというそのダブルのリアル感を感じた。

その時のリアル感が、どんな時も今の自分の根っこになつている。ネットの中にはなく、大勢の中の自分を味わうことが大事で、これからも、常にリアル感を味わって、やりたいことに活かしていきたい。

一冊の本との出会いの先に、人との出逢いが生まれる。

サンマークさんの書籍と、そして、鈴木さんの創られた映画「SWITCH」など、有難い「場」立てによって多くの素晴らしい人との出逢いをいただき、それが連鎖して拡がってきまして。皆さん、ぜひリアルでつながっていきましょ。